



さい帯血バンク NOW

第73号

2013年12月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：加藤俊一（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社ビル内

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

日本さい帯血バンクネットワークは3月に解散 法施行でさい帯血バンク事業は新体制へ

法律の施行は1月から

11月27日の官報に「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」（造血細胞移植推進法）の施行を平成26年1月1日とする政令が掲載されました。なお、これに先立って法の一部が施行され、すでに10月1日に法の定める支援機関として日本赤十字社が指定されています。所管する厚生労働省健康局移植医療対策推進室（旧臓器移植対策室）では円滑な施行に向け省令、ガイドライン等の準備を進めているところです。

法律に基づき、今後のさい帯血バンク事業は、これから認可される各さい帯血バンクと支援機関が行うこととなり、日本さい帯血バンクネットワークは事業を終了することになります。

7バンクが 新体制で事業継続

現在、事業を行っている8つのさい帯血バンクのうち、北海道、東京、関東甲信越、中部、近畿、兵庫、九州の7つのさい帯血バンクは継続して事業を行うため、認可に向けて準備を進めています。法の全面施行後も、新たにさい帯血供給事業者として許可されるまでの間は、現在事業を実施しているさい帯血バンクが支援機関の支援する対象の事業者として見なされます。なお、東海大学さい帯血バンクは、本年度で事業を終了し、以降はこれまで保存してきたさい帯血については、関東甲信越さい帯血バンクに移管することになります。

NW業務は 日本赤十字社に

日本さい帯血バンクネットワークでは、今後補正予算の策定、臨時総会での承認受け、事業の清算業務を進めることとなります。各種委員会の会議は、事業運営委員会（2月開催）、広報部会（本誌最終号を3月発行予定）を除き、12月末をもって終了する予定です。決算処理を1月末で行い、会計監査をへて3月に開催予定の通常総会で事業報告、決算報告が承認されて解散となります。

解散に向けて、業務の引き継ぎを日本赤十字社（一部は日本骨髄バンク）と調整することとなります。さい帯血検索提供申し込みシステムの機器、保守管理、回線等の契約も日赤に引き継がれ、移植のためのさい帯血提供には支障のないように現行の体制のまま移行することになります。さらに、ネットワーク事務局の業務も日赤へと引き継がれます。

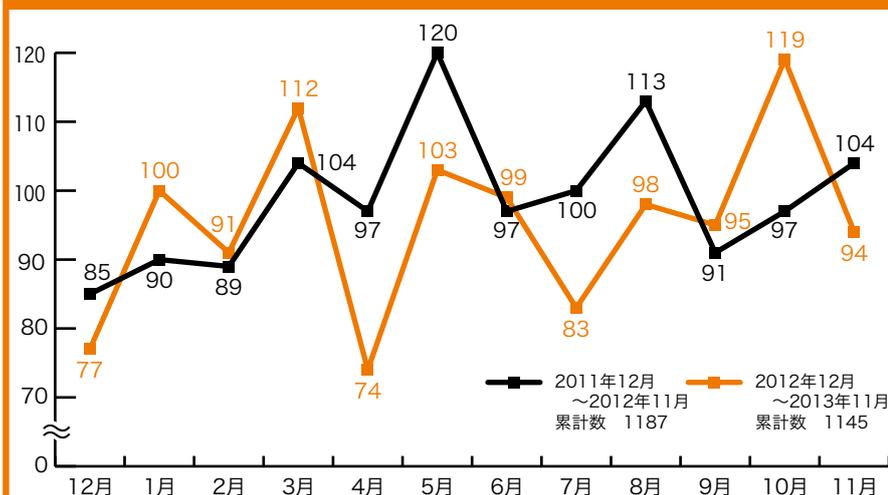
「きずなちゃん」は今後も

また、日本さい帯血バンクネットワーク設立5周年の記念大会以来、さい帯血バンクのシンボルキャラクターとして親しまれてきた「きずなちゃん」は、引き続き各さい帯血バンクで活躍することとなりました。



非血縁間さい帯血移植状況 (2013年12月1日現在の速報値)

移植数（累計） **10321** 公開数 **19439**



※複数さい帯血移植数を換算しています。



バッグ破損事例調査報告

兵庫バンクは安全性確認後に再公開へ

兵庫さい帯血バンクで相次いで発生していたさい帯血凍結保存バッグの破損事例により、今年8月に厚労省から兵庫さい帯血バンクに出荷停止の要請が行われ、検索対象から除外する事態となっています。

これまでに日本さい帯血バンクネットワーク技術部会では所属8バンクの破損事例調査を行いました。各バンクで把握している事例は17例で移植に使用されたものはありませんでした。破損部位はチューブが1例、連通路シール部分が9例、不明が7例、原因は外部からの物理的な力によるものが1例、チューブ接続不良によるものが1例、原因不明は15例でいずれも兵庫さい帯血バンクのもので

した。

また、厚生労働省では移植病院（209病院、266診療科）で同様事例の調査を実施し、すべての医療機関から回答があり、16例の事例が確認されました。16例すべてが移植されましたが、直接の健康被害は確認されていません。破損部位はチューブが8例、バッグ本体が6例、連通路シール部分2例でした。原因は外部の物理的な力が12例、チューブ接続不良が1例、原因不明が3例でした。

兵庫さい帯血バンクでは9名の外部有識者による調査委員会（小寺良尚委員長）を設置して9月から会合を重ね、原因と対策などを検討してきましたが、12月中に最終報告が行われることになっています。これまでに他バンクとは異なる凍結防止剤の使用やバッグをシールする際の問題点などが指摘されています。兵庫さい帯血バンクでは原因究明と防止策を策定し、安全性を確認してから保存さい帯血を再公開したいとしています。

【記事訂正のお知らせ】

本誌第72号（10月15日発行）第2面の「バッグが破損するってどういうこと？」と題した記事中に「凍結バッグは移植用さい帯血の入室と検査用の小室とに分れています」という表現がありますが、小室も検査用ではなく移植に使われますので、ここに訂正をさせていただきます。

最終号は3月15日発行

日本さい帯血バンクネットワークの解散にともない、さい帯血バンクの広報誌・本誌「さい帯血バンクNOW」もその役割を終え、次号をもって最終号となることになりました。隔月刊の本誌ではありますが、最終号（第74号）は1カ

月遅れの3月15日発行とし、日本さい帯血バンクネットワークから最後のさい帯血バンク関連情報をお届けします。なお、来春以降は支援機関の日本赤十字社がさい帯血バンク情報提供を担うことになっています。



すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

NIPRO

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO

ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号



連載第6回 元気になりました

突然の白血病に、 闘病を支えてくれた私の信念

猪狩 杏奈

私が急性骨髄性白血病と診断されたのは2011年10月のことでした。入院すらしたことがない私がなぜ白血病に……と大変驚きました。

くしゃみが止まらず、かかりつけ医でアレルギー検査を受けた結果、血液像の結果が思わしくなく、専門の血液内科を受診するよう紹介状を渡されたのがきっかけでした。問診の段階で「ほぼ間違いなく白血病で、いつ死んでもおかしくないので即入院を」と言われたにも関わらず医師に反抗して一度は病院から帰ったのが今となっては良い思い出です。ちょうど移植から丸一年、記念としてこの手記を書くことにしました。

白血病の治療に関しては、病院の医療チームを信じてお任せしていましたので割愛し、私自身が入院中に取り組んだ事、意識した事をご紹介しますと思います。

1.知る事

病名宣告を受けてから、とにかく病気について書かれた書籍、文献、インターネットなどを活用してたくさんの情報に目を通しました。まずは敵を知り、自分の体に起きている事を知ることで病と闘う戦法が決まるので非常に大事だと思います。知識を身につけると、何を聞いたら良いのかわからないという事態を防ぎ、不安や不明な点があるときに医師や看護師に質問するポイントが絞れます。ただし、統計のデータには一喜一憂せず、あくまで参考情報とする必要があります。また、患者自身だけでなく、家族の人も一緒に病気を理解してくれると患者としては大変心強いです。

2.信じる事

病名宣告から現在に至るまで、『死』への不安が全くないわけではあり

ません。日本の医療技術の高さ、担当して下さる経験豊富な医療チームの存在、そして私自身の持っている無限の可能性を信じる事でその不安はほとんど顔を出しません。

白血病も今では治らない病気ではなく、生選している人がたくさんいます。他の人にもできる事は自分にもできないはずはありません。言い換えると、私にできる事は他の人にもできるという事です。是非ご自身を信じてください。

3.入院中、気をつけた事

口腔ケア——毎日6回の歯磨きとこまめなうがいをする事で口内炎に悩まされる事はありませんでした。食事——点滴に頼らず、口からの食物摂取を心がけました。食べられない時は無理をせず、食べられる物を少しでも食べるようにしました。体力の低下も少なく、味覚障害も残らず、元気に退院できたのも食事のおかげだと思います。体の細胞は食べる物で造られる、ということ意識しました。

睡眠——早寝、早起きを心がけ、眠たい時は眠るのが一番です。

トレーニング——治療を受けるには丈夫な肉体が必要です。治療後回復を早め社会復帰するためにも寝たきりではよくありません。私は体が動かせる時には病棟内を散歩したり、許可をもらって無菌室にダンベル、バランスボードなどを持ち込んで筋力が低下しないよう努めました。



移植1周年記念パーティーで（筆者は前列中央の女性）

4.目標を持つ事

入院当初から広く様々な情報に触れるようにしました。その中である脳科学者の対談を読んで、イメージが非常に大事だと感じ、それからは退院後に〇〇をしたい、何歳になったら〇〇をする、など具体的な目標を設けて、目標を達成している自分の姿を鮮明にイメージするようにしています。私が最初に設定した目標は毎年楽しみにしていた野外ロックイベントに行くことでした。

その後の経過としては、移植から92日で退院、185日で職場復帰を果たしました。移植1周年を迎えた日には治療にあたってくれた病院スタッフと記念パーティを開きました。こんな事を言うと驚かれると思いますが、私は病気になった事を良かったと思っています。もちろん、大切な人達に心配をかけて申し訳なく思っていますし、病気になった事で失った物もたくさんあります。しかしそれ以上に得る物・気付かされる物も多かったのが事実です。多くの人々に支えられて今がある事を忘れず、感謝の気持ちを持って、今後できる事から少しずつ恩返しをしたいと思っています。

【編集部注】寄稿後、猪狩さんは再発と診断され、治療を再開されたとのこと。



移植病院 訪問

②7 佐世保市立総合病院

最西端の地域医療を ささえる病院



佐世保市は長崎県北部地方にあって日本の本土最西端に位置する都市です。佐世保港から北へ25キロ、平戸瀬戸まで連なる大小208の島々を九十九島といい、素晴らしい景色が広がります。4つある有人島からフェリーに乗って通院する患者さんもいます。地域に密着した病院での移植医療についてお話をうかがいました。

さい帯血移植の 発展をめざして

佐世保市立総合病院の病床594のうち、血液内科は51床（内クリーンルーム6床）あって、急性期から慢性期まであらゆる血液疾患の患者さんの診療にあたっています。同種移植が行われるようになったのは1996年9月からであり、2013年10月までの累計移植数は164件です。さい帯血移植は2004年10月から始まり、計91回おこなわれました。近年の5年間では全体の移植数の73%を、さい帯血移植が占めています。また、疾患としては全体の移植数の30%程を成人T細胞白血病が占めているのが特徴であり、その内の約50%はさい帯血移植です。病気がわかった段階から移植が検討される疾患でもあり、初めから患者さんを見ることができ適切な移植時期を検討することができる環境にあると、血液内科管理診療

部長の森内幸美先生は語ります。さい帯血移植の最大の特徴は準備の早さにあります。適切な時期にタイミング良く移植を行うことができる利点を最大限に活用して、一人でも多くの患者さんが元気になって退院できるように日々努力していきたいと話してくださいました。また、「さい帯血バンクのみなさんにはいつも助けられています。生着不全の際の緊急出庫などにも迅速に対応していただいています。全てのバンクが同じような体制を整えられるともっと良いですね」とさい帯血バンクに期待しているお気持ちもうかがうことができました。

チームで支える移植医療

元気になって退院するためにも、さまざまな職種の力が必要になりますが、移植前には看護師との情報共有は欠かせません。医療ソーシャルワーカーや栄養士が参加するカンファレンスも週

に1度行っています。離島など遠方からくる移植患者さんも多く、移植予定が決まると外来通院日にあわせて病棟看護師がオリエンテーションや病棟見学を予定し、限られた時間の中でスムーズな準備を心がけている看護師さんの献身的な姿に心をうたれました。看護師

の小原奈々緒主任は「外来から森内先生が必ず患者さんの情報を教えてくれるので、できているだけです。本当に先生を中心として患者さんを支えているチームだと思います」と語ってくれました。立ち上げ当初からの移植チームを担っている小原主任は、移植医療の変化を間近でみてきたおひとりです。また「受け持ち看護師はより積極的に患者さんと関わり、継続した看護ケアの提供に努めていることも、チームで支えられる一つの要因です」と、牟田典子看護管理師長が話してくれました。地域に密着し、工夫しながら移植医療を行っている森内チームの力強さを感じました。患者さんが安心して治療を受けている姿が目に見えます。

■善意のお気持ちに感謝します■

兵庫県	村上貴公様	30,000円
大阪府	福田博行様	30,000円
静岡県	栗田律子様	10,000円
埼玉県	大寺信行様	6,000円
埼玉県	菅波雅人様	5,000円
神奈川県	井上康久様	3,000円
	匿名	5,000円

■寄付受付は終了しました■

すでに本誌でお伝えしているように、造血細胞移植推進法の施行にともない、日本さい帯血バンクネットワークは来年3月末をもって事業を終了し、解散することになりました。これにより、みなさまからのご寄付の受付も終了することになりました。これまでのご寄付は、主に普及広報関係の活動に有効に活用させていただきました。長い間、多くの皆様からご支援を賜りましたこと心から感謝申し上げます。



病室からは海が